

「風と共に去りぬ」の講演原稿

「世界文学を学ぶ会」発足の背景

皆さま、こんにちは。今日はお忙しいところ、またあいにく曇り模様の寒い中をご来場いただきありがとうございます。今年の3月、「世界文学を学ぶ会」を立ち上げたばかりに緊急事態宣言が出たりして今日がようやく2回目になりました。

4月の第1回は「ドン・キホーテ」でしたが、今回は「風と共に去りぬ」を取り上げたいと思います。初めて参加くださった方もいらっしゃいますので最初にこの会の発足の経過について申し上げます。

実は一昨年、府中に拠点を置く「TAMA 市民塾」で講師の募集があり、世界文学紀行との講座で応募したところ採用され、昨年の4月から講座が持たれることになっていました。こちら昭島市の公民館やアキシマエンスにも受講生募集のチラシが置かれていました。〈こちらです〉

ところがコロナ禍で1年間休講となり、最終的に私の講座については今年の10月から、となりましたが、当時、緊急事態宣言の延長でこちらもキャンセルとなりました。そこで、ならばせつかく準備した写真やリポートを地元昭島でと思い立った次第なのです。

定年後に文学作品の舞台を訪ねた数が15になり、講師団体としての法人「シニア大楽」の紹介で、都内や近県でときどき単発で、あるいは、いくつかの作品を合わせて何回か講演もしてきましたが、まだ「全体を総括」してという機会はありませんでした。

そこで、せつかく撮った作品の舞台の写真が多くの方々の参考になればとの思いと、自分自身の年齢も考え（今年80になりました）、文学紀行の総括をする最後の機会と思って取り組んでいる次第です。

「世界文学を学ぶ会」として申請した講座は市の教育委員会、教育長から認証され正式に登録されました。個人的な感想ですが、こんな素晴らしい総合図書館ができたので、アキシマエンスもハードだけではなく、この文学紀行のような市民サービスのソフトも充実して欲しい、と思うところではありますが・・・。

講座は原則、毎月第3金曜日のこの時間に1年間で12回を予定していますが、月によって会場やプロジェクターが予約できない事情から日にちが変更になることもあります。そのときはまた事前にご案内するようにいたします。

今日の講座をご覧になり、面白そうだったら続けて参加していただければ嬉しいですし、ご自分の興味ある作品だけに参加いただくことでも大丈夫です。お友達を誘っていただくのも大いに歓迎いたします。

受付のところでお名前と連絡先（メールか電話）を書いていただきました。コロナ禍で主催者はその把握をしていなければならないからです

今日ここにいらっしゃる方々は私がお付き合いいただき、またお世話になっている、シルバー人材センター、昭島の国際交流部会、早稲田大学の校友会、瑞雲中学校の先

生、つつじが丘団地のシニアクラブ、英会話教室の生徒さん、また近隣の親しくしていただいている皆さまに案内を差し上げた方々です。同じ市内のことですので、会場にお知り合いの方もいらっしゃるかと思います。皆様の交流の場にも役立っていけば嬉しい限りです。

今日の講座では、最初に物語のあらすじをご紹介、続いて私が作品の舞台を訪れたときの写真を紹介しながらお話をし、最後に映画「風と共に去りぬ」の有名な18のシーンと登場人物が発した言葉のいくつかを紹介いたします。英語の勉強にも役立つようにと一部は英語と日本語での解説をいたします。1時間弱を予定しています。

その後一度、窓を開け空気を入れ換え、机も懇談し易いように並べ約30分間ほどの話し合い・懇談ができればと思っております。自由に感想やご意見をいただければ嬉しいです。話し合いが進みやすいように、懇談のための仮のトピックをお配りしておりますが、これにこだわることなく自由にご発言いただければと思います。終了は3時を目途にしております。ご都合で参加されずにお帰りいただいても結構です。

ご案内が長くなりました。さっそく今日のテーマ「風と共に去りぬ」に入っていきたいと思っております。

タイトル <以下、赤字はパワーポイントで映る写真や文字です>

大変な長編ですが「風と共に去りぬ」をお読みになった方はいらっしゃいますか？<挙手を依頼する> 映画はどうでしょうか？<挙手> 舞台をご覧になった方は？

読んでいらっしゃる方、また映画を鑑賞されている方は、懇談の場でご自分の読後感や参考情報などを話していただけますとありがたいです。私も「風と共に去りぬ」の専門家でもありませんので皆様からもいろいろと教えていただきたいと思いますので。

映画の看板

今から半世紀以上も前、まだ自分が中学生の頃のことでした。信州のローカル線（飯田線）の駅前広場に、当時としてはとてつもなく大きな映画の看板が貼り出されていました。鮮やかな色調に英語のタイトルが入った画面をバックに、豪放な男性と美貌の女性の接吻シーンが、子供心にも強烈な印象を残したものでした。当時は「キス」というよりも「接吻」または「口づけ」が主流でした。男女が一緒にいる姿を「カップル」ではなく「アベック」と呼んでいました。今は男性同士、女性同士のカップルもいて時代の変遷を感じるところです。

『風と共に去りぬ(“Gone with the wind”)』は、小説もですが、この映画によって世界中のファンを魅了したといえるでしょう。マーガレット・ミッチェルが本を出版したのが1936年。映画は3年後の1939年に初公開されています。約4時間の長編ですが、10部門でアカデミー賞を受賞した映画史上、不朽の名作で、波乱万丈のストーリーとロマンが一気に視聴者を惹き込んでいきます。仮りに本を読んでいなくても映画を観ている人は多いでしょう。

人々の心を潤し感動を贈ってくれるもの——その一つが文学でありまた映画だとも言えます。聖書に次いで世界で最も読まれているという『風と共に去りぬ』が、出版70周年を迎えた2006年6月（少し古いですが「ドン・キホーテ」に続く文学紀行の2作品目でしたので）、私はその舞台となったアメリカ南部のアトランタ、ジョージアボロ、そしてニューオーリンズを訪ねました。

最初にこの物語のあらすじについておさらいしておきましょう。

アメリカ南部の地図

舞台は奴隷制が残る1860年代のアメリカ南部・ジョージア州。南北戦争の頃。アイルランド系移民で一代で成功した農園主の娘、美しいスカーレット・オハラは、自分と同じ上流階級で長身の美青年アシュレー・ウィルクスに恋をしていた。スカーレットはアシュレーに想いを打ち明けるが、彼はメラニーと結婚すると言う。痲癩を起こしたスカーレットはそばにあった花瓶を壁に投げつける。偶然、一部始終を目撃したレット・バトラーは、彼女の生命力にあふれた躍動的な姿に強く魅かれる。

スカーレットはアシュレーへの当て付けのためにメラニーの弟（チャールズ・ハミルトン）と結婚するが、チャールズは結婚後まもなく戦場に赴き病死。スカーレットは17歳にして未亡人となった。

そのスカーレットの前に、無頼な行為で社交界から締め出されていたレットが現れる。スカーレットも、喪服姿でダンスパーティに参加するなど破天荒な行為で周囲の度胆を抜いていきます。

そんな中、南軍は北軍に対して苦戦を強いられ、遂にアトランタの陥落も目前となった。スカーレットは脱出の機会を失い大嫌いなレットに助けを求める。レットは炎上するアトランタから彼女を馬車で脱出させ、情熱的な口づけをして南軍の守る前線へと赴く。

ようやくたどり着いた故郷・タラは北軍の駐屯で荒廃し、母親のエレンも病死していた。オハラ家の主となった彼女は飢えを凌ぐことと故郷を守ることに集中する。税金の工面に窮したスカーレットは、妹スエレンの恋人であり商店を営んでいたフランク・ケネディを奪い再婚したが、彼女の不用心な行動が難民から襲われる事件を引き起こし、加害者に制裁を加えようとしたフランクは銃弾に倒れてしまう。

その後スカーレットは、レットと三度目となる結婚をした。二人の間には娘のポニーが生まれ、レットは初めての娘を溺愛する。しかし、スカーレットの想いが依然としてアシュレーにあることを知る。こうしたなか再び妊娠したスカーレットだったがレットの暴言がきっかけで、階段から転落、流産して生死を彷徨う。

この流産は二人の間に深い溝を作ることになり、更にレットがプレゼントした馬から娘のポニーが落ちて死んでしまった。これを機に二人の最後の絆が断たれレットは家に寄り付かなくなった。

娘を失ったショックから抜け切らないうちに、メラニーまでが産褥により命を落とす。スカーレットは、この時初めてアシュレーを奪った恋敵として憎んでいた筈のメラニーを、実は心から愛し頼りにしていたことに気付く。また、死の床のメラニーからレットの自分に対する愛情を知らされ、初めて、自分も愛しているのはアシュレーではなくレットであり、これまで彼女を理解し助けていてくれたのも彼女だということを自覚する。

だが、レットは既にスカーレットを追うことに疲れ切っていた。一人で故郷のチャールストンに帰ると言う。スカーレットは必死に泣きすが、もはやレットの決意をひるがえすことは不可能なことを悟った。

自分を支え続けてくれたレットとメラニーを同時に失い遂に孤独となったスカーレットだったが、彼女はやがて明日に希望を託し、絶望の中から一步を踏み出す。

といったところですね。「あらすじ」だけでもこんなに長くなってしまいました。

アメリカ南部の地図

アトランタ編

さて、私が作品の舞台を訪れた 2006 年、アトランタでは出版 70 周年を記念するイベントが開催されていました。私はまず市内にある作者のミッチェルが住んでいた家を訪ねました。**ミッチェルが住んでいた家 (2 枚)**

1900 年生まれ、「アトランタ・ジャーナル」の記者だった彼女は 26 歳のときに足をくじいてから記者をやめ『風と共に去りぬ』の執筆にとりかかりました。南北戦争という劇的な時代を背景にした入念な資料の裏付けが、単なるロマン小説以上の重みを与えています。

作品は世紀の大ベストセラーになりましたが、彼女はこの一作のみで別の作品を書くこともなく、タクシーにはねられ、48 歳の若さで亡くなったのです。

家はチョコレート色の 2 階建て。専属のボランティア・ガイドだという婦人のリンダさんの案内で家の中を回りました。

本人の肖像画 タイプライターで執筆作業 タイプライター

1・2 階には家族の写真や当時の生活を反映した家具が置かれ、1 階の執務部屋には何千ページにおよぶ原稿を打ち出してきたであろうタイプライターも机上にありました。

一方、別室には人種解放運動の指導者 **マーチン・ルーサー・キング博士関係の写真** が数多く展示されていました。作品は発表直後から圧倒的な人気を博していったのですが、黒人社会からは批判の声が相次いだのです。

「ミッチェルは奴隷制度を認め賛美している」。「スカーレットのお目付け役、黒人の召使いマミーが“善良で忠実”と言われるけれど、小説に出てくる主人と召使の関係は大変なごまかしだ。あくまでも奴隷と使用人の関係ではないか・・・」等々。

ガイドはキング博士の写真の前で強調しました。「ミッチェルは後年、黒人の地位向上のために大変な貢献もしているのですよ。彼女はキング博士が卒業したモアハウス大学の黒人学生のために奨学金も出しています」とも。

ほかに 2 枚の写真あり

バス停の写真 この日の午後、私は同じ市内にある **キング博士の生家**（続いて家の説明の看板あり）と国立歴史地区に足を伸ばしました。歴史地区の展示館、「道を開く勇氣」、「暴力と非暴力」についての言葉、キング博士のプレート、展示館を出た先の広場には非暴力運動の象徴である **ガンジーの像**が、また **モアハウス大学**の前には **キング博士の大きな像**がありました。

1964年、最年少でノーベル平和賞を受賞、公民権運動をリードした氏は1968年に凶弾で倒れましたが、黒人への差別撤廃を訴えたワシントンでの10万人大行進での叫びは、「ケネディ大統領と並び20世紀の最高の演説だ」といわれ歴史に残る名演説となっています。

I have a dream that one day on the red hills of Georgia, the sons of former slaves and the sons of former slave owners will be able to sit down together at the table of brotherhood.

「私には夢がある。このジョージアの赤土の丘の上で、かつての奴隷の子孫と、かつて奴隷を所有していた者の子孫が、同胞として同じテーブルにつく日がくるという夢が・・・」

長時間の演説の一部ですがとても分かりやすい言葉での呼びかけですよ。

著者ミッチェルからそれてキング博士のことを少し詳しく紹介してきましたが、人種問題、特に黒人問題は、今なおアメリカ社会が抱える最重要課題の一つであることから小説の背景をお伝えしたかったからです。

アメリカ南部の地図

② ジョーンズボロ：

翌日、アトランタに住む友人Kさんの運転する車で **ジョーンズボロ (2カット)** を訪れました。片道7車線のフリーウェイを南へ約30分、そこから右に折れて約5分。物語の舞台「タラ」とされる地です。

かつて南北戦争に向かう兵士たちを乗せた列車の通る **ジョーンズボロの駅舎**は『風と共に去りぬ』の博物館となっていました。

入り口。館内には小説に関する資料、各国で出版された初版本、南軍の兵士達を乗せた列車、映画の作成時のエピソードや写真、撮影に使われた衣装が展示されていました (計6カット)。 「両陛下もビックリ」も

館長のバージニアさんは60代を思わせる銀髪の品のある婦人でした。こちらの質問に「ええ、毎日、世界中から愛読者がやってきます。国内は全地域から。国外で多いのはスイスとドイツかしら。先月はロシアから大勢、それに中東の国々からも来ましたよ。そうそう、タラの故郷アイルランドからも若い人たちが訪ねてきたわ。夏のシーズンには日本からも1ヵ月に300人くらいはやってきますね」

外に出ると私は線路をまたぎながらカメラの構図を決めました。**線路の写真**。電車はしばらくは来そうもありません。でもまったく走っていないと思ったら、そうでもな

かった。同行のKさんによれば「南北戦争の当時から時代は移り、現在とはときどき貨物列車が走っているだけ」とのことでした。

南北戦争について少し——1830年代には経済的にも政治的にも南部が力を持っていたが、北部の急速な発展で優位を奪われていった。南部の7州が州権論によって連邦脱退を宣言、これに4州が加わって11州で南部連合国を作った。

内乱(アメリカ国内ではこれを“Civil War<市民戦争>”と呼んでいます)は5年にわたり、南部は徹底的に破壊されました。1863年にはリンカーンが奴隷解放を宣言。また「人民の人民による人民のための政治」との有名な演説も残しています。

アイルランドから移住し、タラの農場主となったジェラルド・オハラ、妻である淑女エレンが奴隷を使いながら農場を運営していきます。わがままで気の強い夫妻の娘スカーレットと心優しい淑女メラニー、豪放で現実的な男性レットと軟弱な哲学青年アシュレーを対比することによって、ミッチェルは読者の心をつかむのに成功しました。(後半の映画紹介のところでこの4人を紹介していきます)

戦争が始まると、南部の人たちは自分たちの勝利を疑わなかった。ただ、レットと、アシュレーだけは南部の運命を予感していました。それぞれ対照的な性格を持つ人間が、このタラとアトランタを舞台に戦争のはざままで生き抜き、ある者は死に、愛への葛藤を繰り広げていったのです。

レットが手綱を取る馬車で戦火のアトランタを逃れ、タラに帰ってみると母親は死に、父親は発狂し、奴隷は逃亡していた。食物もない。絶望の底でスカーレットは立ち上がっていくのです。

博物館のすぐ近くに**プランテーション(大規模農園)**がありました。広い敷地内に白亜の大きな2階建て。家の裏側には小さな**奴隷小屋(2カット)**がいくつもありました。周囲には緑豊かな林と農園が広がっています。赤土の大地に覆われたジョーンズボロは、大都会アトランタの喧騒から離れ、かつての綿花栽培の地をしのばせる静かな落ち着きをかもし出していました。

訳本では次のように綴っています。(大久保康雄、竹内道之助)

「架空の土地タラで南北戦争のなか多彩な人物があやなすロマン。スカーレットはタラを逃げ出すことはできなかった。赤土の耕地が彼女のものだという以上に、彼女は赤土の土地そのものだった。彼女は血のように赤い土壌に、ふかく根をはって、綿花のようにそこから生命を吸いとってきた。(中略)明日——おお、明日！明日こそ、あたしは自分の首にくびきをつけてでも働こう。明日こそ、やるべき仕事が山ほどある！」と。

物語に直接関係はありませんが、せっかくなのでアトランタの街の写真を4枚ほどご紹介します。**高層ビルの建つ市内、CNNの本社**、365日24時間、ニュース専門のテレビ局です。世界中にアンテナを張っていてニュース報道では最も速くて正確。かつて敵対国キューバのカストロ首相も番組を見ていたと言われます。

私も専属のスタッフの案内で中を見学することができました。もう 1 枚アップで。1996 年にはアトランタオリンピックが開催されました。その会場の跡です。有森裕子はその前のバルセロナに続いてメダルを獲得していますね。そのとき彼女がに言った言葉はなんでしたっけ？

「自分で自分を褒めてあげたい」。一時期とてもはやりましたね。

アメリカ南部の地図

③ ニューオーリンズ：

スカーレットは「愛」よりも、自分のわがままと都合に合わせて結局 3 回結婚しました。そして 3 回目に結婚したレット・バトラーとニューオーリンズへ新婚旅行に行きます。『風と共に去りぬ』の中心舞台はアトランタとジョージア州ボロ(タラ)ですが、後半では海岸都市ニューオーリンズ、街の写真も登場してきます。レットがたびたび訪れる場所であったのです。

本では次のように綴っています。「彼女はおもしろくてたまらなかった。戦争前の春以来味わったことのない楽しみを味わった。ニューオーリンズは、ふしぎな魅力をもつ土地だった。スカーレットは、まるで終身刑の囚人が釈放されたような、めちゃくちゃなよろこびをもって、この土地の魅力を満喫した」

ニューオーリンズのあるルイジアナ州は、17 世紀からフランスによる植民地化が進められました。1762 年にスペインが接収。その後、再びフランスが統治するようになり、1803 年にはルイジアナの残りの領地と共にアメリカに売り渡された。町は南部の貿易の中心ともなり、フランスとスペインの文化が混交、ジャズ発祥の地として、世界の観光客を魅了する都市となっています。

フレンチクォーター、プランテーション、クレオール料理など、小説に書かれている南北戦争当時の姿そのままを残しています。私が訪問した前年の 8 月、米国史上最悪と言われるハリケーン「カトリーナ」が襲いました。海面より低い湿地も多いため 8 割が浸水。被災直後、フレンチクォーターの街角だけで 1 千人以上の市民が死亡。ハリケーンの影響で亡くなった人を含めると、ルイジアナ州の死者は 1500 人を越えたと地元紙は伝えていました。

それから 1 年。海面より高い位置にある中心街フレンチクォーターはすでに賑やかさを取り戻していました。バーボン・ストリートには音楽と観光客があふれ、ストリート・ミュージシャンも戻ってきていました。同市の観光スポットやホテルのウェブサイトでは呼びかけていました。「皆さんを受け入れる準備はすでに整っています。足りないのは“あなた”だけなのです」。(いい文句ですよ。コロナ禍の日本の観光地で訪問客を待つ日本のホテルや旅館、土産品店の呼びかけに通じますね)

海岸付近の写真 6 枚、道化師の写真 3 枚、ミシシッピ川とクルーズ船 4 枚、CNN のビル 1 枚

私には、ここで再びスカーレットの生きざまがかみ合ってきます。南軍が敗れ、貴族的な南部社会は風と共に去っていった (A Civilization gone with the wind)。二人の間に生まれた最愛の娘を乗馬で亡くし、頼りにしていたレットに棄てられた彼女の最後の支えとなったのはタラの赤土でした。勝気だったスカーレットは、今度はその意志の強さで、自分の人生を開き、家族や周囲の人々も救っていきます。

時代が、社会が混沌としているときは、勇気あるものが生き残っていく。物語は次の言葉で結ばれています。

“After all, tomorrow is another day”. 文字どおり訳せば「つまるところ、明日は別の日なのだから」となるでしょう。でもこの長編小説の最後の言葉は、日本語の書籍ではさまざまに翻訳されています。

「明日はまた明日の陽が照るのだ」「明日は明日の風が吹く」「何はともあれ、明日はまた別の新しい日なのだから」「あしたがあるさ」等々・・・

すべてを失い絶望の底から立ち上がる支えとなったものもタラの赤土でした。彼女が再び未来に向かって生き抜いていこうとする言葉として、私は次のような意味をこめて訳してみました。

「明日はまた新しい人生の始まる日」「すべてはこれから始まる」という前向きに捉えてみたのです。仏教の説く「本因妙」にも通じています。

Tomorrow とは「明日」。「明日は未来」「未来とは可能性」に通じます。現在が大変であっても、スカーレットのように「明日がある」「明日こそはこの問題を乗り越えて人生を開いていこう」との強い決意にたっていきたい。スカーレットはわがままで勝手に人生の見本にはならないかもしれないけれど、「生きていく」というその強さだけは学んでいけると思うんです。

長編小説の最後の最後の言葉「Tomorrow is another day.」はこの作品のテーマであり、作者ミッチェルが読者に訴えたかった点ではないかと私は思ったところです。

その意味でこの言葉は、ニューオーリンズでハリケーンの惨害のなかから再び立ち上がろうとしていた人々、各国でさまざまな苦難に直面している人々、コロナ禍で商売が行き詰まっている人々、今、人生のどん底で闘っている人々にも、勇気と希望を贈ってくれるのではないかと、思うのです。

「Gone With The Wind」のスクリーンから

ところで「風と共に去りぬ」はあまりの長編なので読んだことはない。でも映画を見たという人は多いでしょう。ここからはその映画のシーンのいくつかを取り上げながら、登場人物が発した有名な言葉を取り上げてみたいと思います。

27 スペイン語版の本の表紙です。南北戦争で街が燃えさかる中、主人公のスカーレット・オハラとレット・バトラーの接吻シーンは余りにも有名で本の表紙を初めあらゆる媒体で使われていますね。

28 パーティーに行くスカーレットが腰を細く見せるために召使いのマミーにきつく絞らせませす。象のような小さな賢い目をしたマミーは長い間オハラ家に仕えてきた従順な奴隷の召使いで、ズバズバと忠告もしスカーレットや他の子供たちにとっても畏怖の存在でした。

29 上流階級の若い男性達に囲まれてご機嫌なスカーレット。

30 最初に結婚したチャールズ・ハミルトンが南北戦争の戦場で病死しました。スカーレットは喪に服さなければいけない立場なのに喪服を着て社交の場に出ていきます。そこで彼女の秘密を知ったレットに会うのです。

31 スカーレットは夫が死んだばかりなのにパーティで喪服のままレットと踊ります。人の目も気にせず楽しそうにダンスを楽しみ、「これで私も札付きね」と。

32 大河小説のもう一組の主人公のアシュレー・ウィルスとメラニー・ウィルクスですね。スカーレットが思いを寄せる名家出身で教養もあり、紳士的な長身の美青年。スカーレットの誘惑に悩まされるが、最初からメラニーと深く結ばれていた。万事において精神主義的で博愛主義的な綺麗事を好むが、行動力には乏しい。

メラニーはアシュレーの妻でチャールズの姉、スカーレットの義理の姉にあたる。病弱だが、心優しく純真で健気な女性。家族を心から愛しており、またスカーレットが自分に深い嫉妬を抱いているとは知らずスカーレットを信じ、まるで実の姉のように一途に慕っていて、世間の非難からも敢然と彼女を庇う。全てを包み込む包容力の塊のような女性で、その優しさはレットをも包み込むほど。死の床でアシュレーをスカーレットに托します。

33 アシュレーの前でのスカーレットとメラニー。二人の会話の内容は分かりませんが・・・

34 南北戦争で燃えさかる街。この中をスカーレットはレットが操る馬車で故郷のタラに逃げ帰る圧巻のシーンです。50年くらい前ですが私が帝国劇場で見た舞台では本物の馬が舞台に登場して話題になったものです。

35 本の表紙の写真と同じくいろんなポスターにも使われていますね。

(街の混乱模様の写真を1枚追加している)

36 必死の思いで戻ったタラは北軍の戦士に荒らされ尽くされていました。しかも、頼りにした母親は病気で死んでおり、残った父も精神的におかしくなっていた。

アイルランドから移住したスカーレットの父親は、1代で農園を築き上げました。

いつかタラの土地が長女スカーレットのものになることを話す際に、「そんなものはいらない」というスカーレットに父ジェラルドが言ったセリフです。

"It's the only thing that lasts!" 「最後まで残るものは土地だけだ」全てを失ったとしても、土地だけは存在し、また息吹を挙げられる、と。

37 スカーレットも全てを失った段階で、「私にはタラがある」と立ち上がっていきます。自分の手を汚しながらでも耕作に励んでいった。

37 38 "I'll never be hungry again!" 「私はこの大いなる試練に決して負けません。家族に二度とひもじい思いをさせません。きっと生き抜いてみせます。その為には嘘もつき、盗み、騙し、人をも殺すでしょう。神様に誓います。二度と飢えに泣きません」。スカーレットが絶望の中で泣き叫ぶように言ったセリフです。

39 スカーレットはレットにお金を借りようとしています。生活に困ってみずぼらしさを隠すために部屋のカーテンで作った衣装を着てレットに会いに行きました。

40 レットはスカーレットと結婚しました。でもスカーレットの心の中にはいつまでもアシュレーへの思いが消えていなかった。そんな彼女の頭を潰してその幻影を追い出そうとするレット。

41 二人の間には女の子が生まれました。ボニーと名付けられレットは彼女を溺愛します。ところが自分が買い与えた馬に乗っていたボニーが落馬して死んでしまった。レットは生きがいを失い、スカーレットとの間も満足せず彼女を棄てて郷里のチャールストンへ帰っていきます。

42 娘も夫も失った彼女は誓うのですね。

“After all, Tomorrow is another day.” この日本語訳については先ほどご紹介したとおりです。結局、頼りになる物は「土地」であり愛するタラである。そこからスカーレットが再び立ち上がっていくところで物語は終わります。

43 映画の最後のシーン。「Road to Tara」は「タラへの道」。真っ赤な夕焼けと大木の影と共に個人的にはとても印象に残る画面でした。

以上で第一部のお話と写真と映画の名場面の紹介を終わります。

長時間のご清聴ありがとうございました。それではこれから10分間の休憩に入ります。どうぞ窓を開けて換気を、この間に腰の運動やトイレを済ませてください。

このあと第二部、約30分の懇談会を持ちます。ご都合のある方はここで帰っていただいても大丈夫です。

なお、たまたま偶然ですが、市民会館の3階の学習室では今日から3日間「市民写真展」が開催されています。私も作品を1点、「赤毛のアン」の取材でプリンスエドワード島に行ったとき、結婚式を挙げたばかりの3組のカップルを撮った写真を展示しています。

「赤毛のアン」は来月の講座で取り上げる作品です。本当に奇妙な偶然ですがよかったら帰りがけにでもご覧ください。